
煌銀のアルジェント

友加

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煌銀のアルジェント

【Nコード】

N5363I

【作者名】

友加

【あらすじ】

「最近、同じ夢を見るの」

高校一年生になった大野風歌は、同じ高校に通う幼馴染で親友の高た月琥珀に夢の話をした。

「気にしなくて平気」

琥珀に言われた風歌は、夢を忘れようとするが、また同じ夢をみて

……。

その夢はとても重要で!?

666年の時を経て、再び激闘が始まる!

プロローグ*夢の中

最近、同じ夢ばかり見るの。

自分ともう一人、銀色に輝く髪をなびかせた女の子。

女の子の名前はアルジエント。

だから私はアルンって呼んでる。

そして、アルンは刀と二丁の銃と魔法で戦ってる。

アルンが戦ってる時、

私、何してたんだっけ…？

ブローグ*夢の中(後書き)

始めちゃいました！

前からこのサイトで小説読んでたんですよ。

で、パツと思いついた話を連載スタートさせました。

次話から本文です。

1*歯車は狂いだす(前書き)

「煌銀」は「こうぎん」と読みます。

早くも敵の登場です。

敵がちよつと気持ち悪く……なつたかも(汗

楽しんでもらえたら幸いです。

1* 歯車は狂いだす

春。それは、別れの季節。

出会いの季節。

始まりの季節。

「うん。いい天気」

ケータイのアラームで起きた大野風歌は、おおのふうかまだ着慣れない制服に袖を通す。

高校に入学して、1ヶ月が過ぎた。

高校には、幼なじみで親友の高月琥珀たかづきはくと一緒に入学。2人の家の中間地点、花の丘公園の時計台に7時20分に集合して電車に乗り、行く。中学のときとは全く違い、なんだか違和感を感じる。

(変わらないのは、うちが見る夢だな……)

春休みあたりから、毎日同じ夢を見るようになった。そのことを、つい先日琥珀に相談したばかりだった。

「気にしなくていいんじゃない?」

それが、琥珀の返事。呑気な風歌は、本当に気にしないことにした。

「そもそもうち、考えること苦手だし」

うん、と頷いて朝食を食べ、家を出た。

しばらく歩くと、風歌を呼ぶ声がした。

『風歌……』

(およ?)

立ち止まって、辺りを見る。近くに、人はいない。空耳だと思い、また歩きだす。

『風歌……』

今度は、さっきよりもハッキリした声で呼ばれる。近くに人は……サラリーマンの人ぐらいだ。

「やいテメー、さっきからうちのこと呼んでんじゃねー!」

サラリーマンの胸ぐらを掴んで言う。すると、頭を叩かれた。後ろを振り向くと、琥珀がいた。

「すみません、こいつバカなんで無視していいですよ」

サラリーマンから風歌を剥がす。

「何すんのさっ」

「風歌は何してんだっ」

「だって、あいつうちの名前呼んだんだよ!？」

「そーかそーか、気のせいだ。よし、行くぞ」

琥珀は風歌を引きずって、駅へと向かう。

「ちょおおおおお!?!?!?!」

風歌に拒否権は、無し。

(あれ?さっきの声、どっかで……)

少し考え、何もひらめかなかったので、とりあえず暴れた。

「うわ!?! 急に暴れるな!捨てて行くぞ」

「すみませんしたあっ!」

「あ、ゴミ回収車だ。すみませーん!これバカゴミなんだけど……」

「スライディング土下座するからあっ」

すると、琥珀がピタリと止まり風歌を見る。

「学校でやれよ」

「ののおおおおんっ!?!?!?!?!」

風歌に拒否権は…無い。

「あ、朝から疲れた……」

あの後、本当にスライディング土下座を教室でさせられた風歌は、クラスの笑い者になった。

「っ……」

風歌の隣で笑いを堪えているのは新しくできた友達、くじょうなか久条那珂。

「笑いたいなら笑えやチクショー!!!」

「え、いいの？」

那珂は腹をかかえて笑いだした。そこへ、琥珀がやってくる。

「なかなかいい笑い方だな」

「だ…だって風歌……あはははっ!!!」

琥珀もさっきのことを思い出したのか、笑いだした。

「いつか覚えてろお!!!」

泣きながら教室を出ていった。

「席つけえ」

担任の中川が教室に入ってきた。右手に出席簿、左手に風歌を抱えて。

「ところで…これは何ゴミだ？」

「バカゴミです」

すかさず琥珀が中川の問いに答える。

「そうか。バカゴミはいつだ？」

「今日です」

「でも、もう時間過ぎちゃったからまた来週ですね」

さらに那珂まで参戦する。

「いじめだああああ…!!!」

風歌は朝から、大忙し。

大野風歌。11月10日生まれ。茶色い髪をツインテールに結んでる、身長の低いバカ。

高月琥珀。9月5日生まれ。日本人とイタリア人のハーフで、オレンジの髪は短い。男っぽい性格。

久条那珂。4月21日生まれ。長い黒髪をおろしている、スタイル

抜群の姐御。

性格はバラバラだが、3人はうまく付き合ってる。

風歌の忙しい学校生活の1日を終えて、部活へ行く準備をする。風歌は家が道場であり、空手・剣道・弓道・薙刀といったことを教えているため、風歌も空手と弓道を幼い頃から教わっていた。

「風歌が弓道部って、意外」

「むむ。那珂さん、これでもうちの家は道場ですよ」

少し頬を膨らます。

「……エイプリルフルは今日じゃないよ？」

「ちょ、那珂テメツ…うちだってそこまでバカじゃないよ」

信じない那珂に対して、風歌は琥珀に助け船を出す。

「残念だけど……事実だ」

俯きながら言う。那珂はひどく驚いた顔をする。

「琥珀ちゃん、何が残念なの！？うち、こっぴどく見えて結構デリケートだからね」

『風歌……どこっ？』

朝に聞いた声が、また聞こえてきた。

(なに…なんなの、この声?)

『聞こえるなら、返事して…』

(どうやって…まさかテレパシーとか!? 『冗談キツいつて!』)

「おい、風歌っ!」

「ふあい!!!」

「どうしたの?急に黙って」

どうやら、2人の声に気が付かなかったらしい。 2人とも、なんだかんだ言って風歌を心配している。

「あー…なんでもない!部活行ってくんね」

そそくさと荷物をまとめて、その場から立ち去る。 扉まで行くと立ち止まって2人に「また明日!」と挨拶をする。

「あ、ああ。また明日」

「うん。また、明日…」

琥珀と那珂は、不思議そうに互いを見て、それぞれ部活へと行った。

(うちを呼ぶ声…あれ、多分だけど夢に出てくる子の声だ)

部活も終わり、今は家路についている。

この変な声のせいで、今日の部活は散々だった。集中力はなくなる、人の話しが全く耳に入らない、射った矢は的にすら当たらない(ひどいときは構えすらしない)、最終的に顧問の村松に叱られた。

毎日見る夢、そして最近聞こえるようになった声。

(これ、絶対なにかあるよ。うちの勘)

考えにつかっている間に、人通りの多い街頭から、閑静な住宅街を歩いていた。点っている外灯も虚しく、辺りは暗い。

(早く帰ろ…)

風歌は早足で歩く。

ズンッ

「っ…！」

一瞬、体に振動が走った。驚いて、おもわず近くの電柱に掴まる。再び歩きだそうと前を見ると、

「なに……これ、」

住宅街が、暗い赤の色に染まっていた。

(思考回路ショートするって!)

背中に嫌な汗が流れる。

よく見ると、家の玄関の電気が全て消えている。カーテンの向こうの微かな部屋の明かりも、ない。

(……っ、帰らなきゃ)

「お前……『銀の魔女』の“鵺”か？」

走りだそうとした風歌の耳に、声が届いた。辺りを見渡しても誰もいない。

「あははは！どこ探してるんだらうね？」

「上だよ上」

風歌が顔を上げると、電線に立っている、顔が2つある黒い怪物がいた。

「ひっ………!」

恐怖のあまり声が出ない。怪物の体は脂のような光沢があり、下にいくにつれ脂肪がある。顔も、右側は上下逆さだ。

「こいつ、『銀の魔女』の“鵺”じゃないのかなあ？」

「でもフィールドにいる。鵺であることは絶対だ」

(シロガネとか又エとか……なんの話し!?)

風歌は隙を狙って逃げようと走ったが、怪物がすぐに反応して風歌の前方に立つ。

「逃がさないよー」

2つの顔が気味悪く笑う。

「“鵺”でも“鵺”じゃなくても、お前を殺すっ!」

「いやあああああ!!!」

怪物の腕が伸び、風歌は手を前に差し出す。すると、一瞬銀色に光った。

怪物の腕が、千切れていた。

「え…今のうちの力?」

風歌は自分の両手を見つめる。

「おのれ…やはり“鵺”かつ!」

「ムカつく!絶対殺す、絶対殺す!」

腕がない怪物は、風歌に噛み付こうと大きく口を開け、早いスピードで近づく。

(やばいつ…殺される！)

「私の“鶴”に、その醜い姿を見せないでくれるかしら？」

鈴のような綺麗な声が聞こえ、風歌の前に現れた少女は、銀の髪に、スラツとした曇りのない太刀を手にした、夢の中で出てくる、

「アルン……？」

だった。

1* 齒車は狂いだす (後書き)

敵の描写はどうでしたか？

書いてる友加も、ちよつとアレでした

次話は、風歌とアルンの絡みを多く入れたいと思っています。

2*2人の出会いは突然に

「『しろがね銀の魔女』!」

怪物が叫ぶ。風歌は、銀髪の少女から目が離せない。

「アルン、なの…?」

少女は「また後で」と口パクをして怪物に向き直る。

「だから、私の“鶴”にその醜い姿を見せないでくれるかしら」

「醜い!?!」

少女は鼻で笑う。

「ええ。とつても醜いわ」

怪物は怒りに震えて、少女に噛み付こうとするが、無駄な動き1つせず躲す。少女は、怪物の視界に入らないように後ろへと回り込む。

「どこへ行ったあ!?!」

「トロいわね。その程度じゃ私に勝てない」

少女は太刀を左から右に、水平にふるった。その太刀捌きが早すぎて、風歌には見えなかった。

(すごい……強い!)

「ぎゃあああああ!!!」

半分に斬られた怪物は、悲鳴をあげながら消えた。最後に残ったのは、白に輝く小さな丸い石。少女はそれを拾い、自分の目の高さを持っていく。

「白…しかも小さい。一番最低ランクね」

「あ……」

風歌はゆっくりと少女に近づいていく。

「ありがとう…アルン、だよね？」

「正確にはアルジエントよ。けど君はそう呼んでたわね」

(やっぱり…夢に出てくる子だったんだ)

風歌は、手に力を入れる。

「この怪物…なに？意味分らないことばっか言ってた」

フィールド、鵜、銀の魔女。それからこの赤に染まる住宅街も謎だった。

「そうね…風歌には話さなきゃいけないことがある……」

アルンは、「解除」と小さく呟き、元の住宅街へ戻した。

「今のは、フィールドという名の結界を解除したの。風歌と話しをたくさんしたいけど…もう夜」

明日はちょうど土曜日。弓道部も土曜日と水曜日は休みだ。

「じゃあ…明日会おう！明日、朝10時にあの電波塔…三吉タワーの下で」

風歌は、緑に光っている三吉タワーを指さしながら言う。

「わかったわ。明日、朝10時に……」

そう言ってアルンは家の屋根に跳んで、跳んで、消えていった。

その後、無事家に着いた風歌はベッドに直行するなり、カバンを放り投げダイビングした。

（なんか…凄かったな）

さっきの出来事を思い出す。

赤い住宅街（赤いとフィールドが展開されている状態らしい）、怪物に、アルン。

（うちが見てた夢…やっぱり意味があったんだ）

ゴロン、と寝返りをうつ。夢には、必ず風歌とアルン。それから名前前は忘れたが、仲間も何人かいた。そして、敵と戦っていた。

（そういえば…夢の中の時代っていつなんだろう？）

毎回、見るたびに違うのは、場所だった。昨日は、白い教会っばい場所。一昨日は、何も無い原っぱ。

(たしか、空に浮かんでいる城みたいなところに襲撃した夢も見たよくな……見たっけ?)

「……………」

夢を思い出そうとして1分。限界を超えた風歌の頭は爆発。

「うがああああ!!」

「うるせー姉貴!マ○オ死んじまったじゃねーか」

「黙れ風歌!今ドラマ超いいところだから」

中学二年の弟と、高校二年の姉に怒られた。

(空のやるー…マ○オの弟も桃とかいう名の姫も死んじまえや。それから葉結姉、見てるのがチャン○ムの誓いってどこの主婦ですかあ!?)

気が付いたら、風歌は寝ていた。

気が付くと、風歌は空に浮かんでいた。

(夢の、中…?)

下を見ると、風歌とアルンの2人しかいない。場所は…建物の屋上らしい。

アルン、この戦いはいつまで続くと思う？

(いつまで？そんなに長い戦いがあるの……？)

いつまでかしらね…それは、誰もわからない。私たちの来世まで666年後か、1332年後か、1998年後か……

666年は長いね。私たちが死んでからまたアルンに会うまでこんなに年月がかかる。

長いわね。その間に、時代はどんどん変わっていく。

でも、私たちは変わらない。

「ふうーかー!!! 早く…起きろおおおおお!!!」

「ぎゃあ!？」

葉結のバカでかい声で目を覚ます。葉結に文句を言おうとすると、遮られた。

「風歌に友達。アルジェントっていう外人の子」

「いいいい今何時!？」

風歌がベッドから降りて時計を見ると、葉結が時間を言うのは同時だった。

「アルン！ごめん、寝坊した」

急いで支度をすませ、階段を掛け降りてアルンに謝る。

「ん。風歌だから許すわ」

腕を組んで言った。風歌はよかった、と言って笑う。すると風歌の母、千草がやってきた。

「風歌ちゃんのお友達？ そろそろお昼になるし、うちで食べていきなさいな」

栗色の髪を1つに結んだ、優しそうな人だ。

「え…そんな、悪いわ」

「悪くないよ！お母さんが言ってるんだよ？食べていきなよ」

風歌はにっこり笑い、

「風歌ちゃんの言う通りよ。食べていきなさい」

千草は黒く笑う。2人に負けたアルンは是、と言うしかなかった。

(昔から風歌の笑顔には、どうも弱いわね…)

1人アルンは思った。

「お、珍しく皆揃ってる!」

居間に入ると、大野家全員集まっているらしく、風歌が言った。

「アルジエント・ディア・スモルツァンドよ。よろしく」

アルンは威厳とした態度を崩さず言った。

風歌も画像を1人1人紹介する。

座椅子にあぐらをかいて座り、競馬を見ているのが父の晴大^{せいたい}。道場を受け継ぎ、今は70人もの人に教えている。

素敵な笑顔でご飯の支度をするのが千草^{ちくさ}。結婚前は晴大に剣道を習っていたらしい。怒ると一番恐い。

チャン〇ムの誓いについて語っているのが、姉の葉結^{はゆ}。葉結は晴大から空手を習っている。頑張つて弟に話し掛けているが、シカトされるオチ。

壁に寄り掛かり、葉結の話しをシカトしているのが弟の(そら)。晴大から薙刀を習っている。ゲームと陸上が命。

千草が作ったお好み焼き（アルンは初めてらしい）を食べ、2人は風歌の部屋に行く。

「お好み焼き…だっけ？」

「そだよ。アルン、気に入った？」

ベッドに座りながら言う。風歌は、アルンに椅子に座るようジェスチャーし、アルンはそこに座った。

「ん。美味しかったわ」

「そっか！」

風歌は嬉しそうに笑う。

「ところで、昨日の話しだけど」

アルンが持ち出した話に、部屋に緊張感が張り詰める。風歌は姿勢を正し、アルンの次の言葉を待つ。

風歌は思ってもみなかった。

毎日、学校行って、笑って、部活をして、平和な日常を送るだろうと思っていた。

まさか、永き戦いに巻き込まれるだなんて

2*2人の出会いは突然に（後書き）

ぐはっ！

風歌とアルンの絡みを多くしたいとか言っていてできてない！

チャン〇ムは、友加の母さんがよく見えます
マ〇才は、友加がはまってたやつです。

次回こそ、2人の絡みを…！

3*夢の真実

666年の永い時を経て、

戦いが、また始まる

「風歌、君が見る夢が、何かわかるかしら？」

「これっぽっちもわかりません」

真剣な顔で答えた風歌に、おもわず笑みが零れる。

「その夢は、私たちの前世の記憶なの」

「前、世……？」

アルンは静かに頷く。

「そう、前世。夢の中で戦っていたでしょ？ その戦いは私たち人間か、敵のどちらかが勝つまで、戦いは続くのよ」

戦いの始まりはアルンの記憶でも曖昧だが、敵は堕ちた人間…つまり、一度死んだ人間。

その人間が死に、その時強い恨みや憎しみがあると、地獄ではない“^{ヘル・ルイン}廃獄界”という所に堕ち、“獄界の王”と契約する。

「“獄界の王” 契約した人間を合わせて“^{ゴブス}生屍”と呼ぶわ」

「ヘル…？ゴ…？」

単語を覚えようと必死にアルンの言葉を復唱するが、

ボヒュンッ！

「あうう……………」

爆発した。アルンはため息をつき、紙に丁寧に書いていく。

「見ながら聞きなさい」

「へい…」

さっき説明したことを、もう1回軽くおさらいする。

「……………で、この“生屍”が“廃獄界”から這い上がって、この世界に再び戻る」

「なんで？」

「死んだときに負の感情を抱いてしまったからね…そりゃ、戻りたくなるわよ」

風歌は生唾を飲む。

「“生屍”が生きていくためには、生きた人間の精気ルネが必要なの」

精気。

生命の源泉たる元氣、精力。生物が生きていくためにも必要不可欠なものだ。“生屍”も元は人間。精気がなければそう長く生きていけない。

なかでも、人間の精気はどんな生物のなかでも極めて大きい。

「だからこつちに戻り、人間を襲う」

“生屍”は、恨みや憎しみを晴らすために地上に戻る。地上に戻った“生屍”は、人間の精気を食う。

「もし、食われたら……？」

「その内死ぬわね」

「っ!？」

「精気を食われた人間は、存在していなかったことになる」

風歌の額に、汗が流れる。頷いたアルンは、静かに言う。

心を食われた人間と関わっていた全ての記憶や物事が、世界から無くなる。

「じゃあ…もしかしたら、うちの友達とか、も……」

「それはないわ。私たちだったら気がつくはずよ」

風歌はよかった、と呟く。風歌を見つめること数秒、アルンはまた話し始める。

「…で、“生屍”に対抗すべく、ある人物が現れ始めたの」

ある人物。それは“生屍”^{ゴブス}と全く逆な存在。“天極界”^{リスト・ヘブン}へ昇った人間の中から、“天界の王”と契約し、力を与えられ対等に戦えられるようになること。契約した人間は、“鵠”^{ぬえ}と呼ばれる。

人間と契約した“天界の王”はこの世に戻ってくると、人の形を成す。そして、2人で1人となった“天界の王”と“鵠”^{クエスター}は合わせて“討伐者”^{クエスター}という。

「戦いが激しくなってね…私たち“討伐者”が不利になった時期があったわ」

「負けたの？」

「まさか。負けてたら、今ごろ世界は“生屍”だらけよ」

「……そうなの？」

分からない、といったふう^{ふう}に首を傾げる。

「“討伐者”か“生屍”のどちらかが全滅するまで続くのよ」

「じゃあ、あの時は引き分け？」

「そうね。“討伐者”もなんとか持ちこたえたわ」

ふうん、と相槌をうつ。

「そういえば…アルン、黒い石拾ってなかった？」

「ああ、あれ。あの石は“精気の石”って言って、“生屍”今までにどれくらいの精気を食ったのが色で分かるのよ」

“精気の石”の色が白だったならば、精気は食ってない。色が黒に近いほど、たくさん精気を食っていることになる。また、“生屍”が強ければ強いほど“精気の石”の大きさや形が大きくて、歪いびつになる。

“天界の王”の力によって“精気の石”を清浄化させると、自分たちに取り込むことができ、強くなれたりする。

「じゃあ、さっきのは白かったしちっちゃかったから雑魚？」

「そ、雑魚」

風歌はまた相槌をうち、ポツキーを口に啜える。

「うちって“鵂”のほうだよ？ えっと…“生屍”だっけ？ 言ってた。『銀の魔女』の“鵂”かって」

「そうよ。『銀の魔女』…ね。私が“天極界”にいたときの呼称よ」

「なるほど……。うちとアルンって2人で1人なんだよね？」

「うん。私たちは、同じ。誕生日もそうよ」

「うちの誕生日は、11月10日」

3*夢の真実(後書き)

2人の絡み……

できてなくね!?

あー駄文すぎて笑っちゃまうよ

ちなみに……

風歌ちゃんたちの誕生日は

友加の誕生日です(殴

4*非日常のハジマリ

アルジエントと風歌の関係が“討伐者”^{クエスター}と“鶴”^{ぬえ}と知らされた。

風歌は驚きと困惑を隠せないでいる。

「いや……いやいやいや！まずいっしょ！花の女子高生がバトつち
やあ
「

風歌は、やりたくないと言う。

「花の女子高生……？何かの間違いね
「

アルジエントは一言で斬り、風歌はうなだれる。

「でも、私たちがやらなきゃいけない。これは絶対よ
「

風歌とアルジエントが合う。アルジエントの、澄んだ翠の力強い
瞳に、思わず視線を逸らす。

「うちに……出来るわけ、ないじゃん
「

「……………」

アルジエントは、沈黙を守る。

「いきなり戦ってください、って言われても……無理
「

「……………」

沈黙が、続く。1分、2分 5分。

沈黙を破ったのは、アルジエントだった。

「……いつ“生屍”が現れるか分からないわ。風歌が私の“鵺”である以上、相手は敵と見なし、容赦なく殺す……」

「……………」

今度は、風歌が沈黙を守る。

「君には絶対死んでほしくない……だから、」

アルジエントは、一回言葉を切り、また続ける。

「しばらくは戦わなくていいわ。だから、私は風歌から絶対に離れない」

つまり、風歌を守る、と言っているのだ。

「え、」

アルジエントの言葉がうまく飲み込めず、たじろつ。

「君と同じ学校に行つて……家も隣のマンションに引っ越すわ」

「そこまでしなくても……！」

風歌はアルジエントを止めようとするが、

「するわ」

また一言で斬る。

「いい？それほど“永遠の戦”^{エス・ウォー}は危険なのよ」

「危険……」

「そう、危険。だから風歌、私からあまり離れないで」

そう言っつて、アルジエントは立ち上がり、部屋を出ていこうとする。

帰り際に、一言

「死にたくなければ、ね」

そう言っつて、ドアを静かに閉めて行った。

（死にたく、なければ…）

風歌は1人、心の中でアルジエントの台詞を復唱していた。

その日の夜は、眠れなかった。原因は言うまでもない、アルジエントの台詞だ。

（死にたく、ないよ）

あんな恐ろしい怪物をみた後の、その一言は強烈だった。

死にたくはない。

だが、それ以上に“永遠の戦”に関わりたくないのが事実だった。死と隣り合わせなのだ、当然の心理だろう。

(うち、これから先…どうするんだろう?)

ベッドの中で、ずっと考えていたら、5時になっていた。さすがに寝なくては、と思って瞳を閉じても、全く寝れなかった。

朝、いつもより1時間も早く起きた。千草しか起きておらず、とても驚いた様子だった。

「なんか、寝れなかったんだよね」

「あら、そうだったの? 授業中、寝るんじゃないわよ」

「ちょ…無理に等しい!」

千草と二言三言話したあと、顔を洗いに洗面所へ向かった。鏡に映った自分の顔を見る。

「うわ、隈できてるし」

うつすらとだが、風歌の目の下には隈があった。一睡もしていないのだ、できて当然であろう。

「うち…本当にどろじょじょ」

しばらく考えた後、風歌の頭はやっぱり爆発した。

「うがああああ！もうどおにでもなれえ！！！」

その後、朝食を食べるも喉を通らず、半分残して家を出た。

「行つてきま……す」

「おはよう。朝出るの意外と遅いわね」

大野家の前に、アルジェントが立っていた。ちゃっかり風歌の学校の制服を着ている。

「ちょおおおおお！？ アルン準備早すぎでしょ！」

「言ったでしょ？風歌から離れないって」

「そ、そうだけどお……」

「今だって、もしかしたら“生屍”が私たちを狙っているかもしれないわ」

「……………」

そう言われてしまったら、黙るしかない。もし、アルンの言っている事が正しいとしたら？本当に“生屍”が2人のことを見ていたら？

（死にたくないよっ！でも…でもさ、うちには戦う力なんてないし。それに、昨日いきなり言われても心の整理ってやつがついてないし）

「…とにかく、風歌は私から離れなければいいのよ。私が絶対守る」
風歌の心を読んだような返答に、少し、本当に少しだけ安心する。

「で、でも！うちはまだアルンのことを信じきってないし、今でも冗談だと思つてたりするし、つか冗談でしょって思つてたりするし…」

一瞬、アルジエントが悲しそうな表情をするが、すぐにいつもの表情に戻る。

「それでもいいわ。…学校、行くわよ」

「うん。あ！」

アルジエントが、面倒くさそうに風歌の方を振り返る。

「あのね、うち幼馴染の高月琥珀って子と一緒に学校行ってるんだけど…」

「ふうん…風歌、紹介しなさい」

「うち！？」

「他に誰がいるのよ。私も学校に通うのよ？友人の1人や2人はつくいけないわ」

なるほど、と風歌が相槌をうつ。

風歌は、琥珀と那珂の事を思い浮かべる。

琥珀の性格は、とにかくサバサバしている。うじうじする奴が嫌い。何事にも白黒させないといやらしく、ハッキリしないと怖い。一緒にいるととても心強い。琥珀に相談事をする、いい事が無い。夢の相談をしたとき、一目瞭然だった。

(気にしなくていいじゃね？だもんな)

相談事をするなら、絶対那珂だろう。

那珂は、頼れる姉後肌。たまに風歌のことをからかうが、琥珀に比べればずっと少ない。はず。困ってる人とか放っておけないタイプで、人の役に立つのが好き。でも意外と頑固なところがあったり、嘘をつかれると、かなり怒る。

(小さい嘘にも怒るからなあ。那珂には冗談があんまし効かないんだよね)

アルジエントは…出会って間もなく、いまいち分からないが、強気な少女だと思う。口調からでも分かる通り、自身に満ち溢れてるかんじがする。風歌にとって、少し絡みにくいところもあるが、1週間もすれば打ち解けられるだろう。

それに、アルジエントの隣にいうと、何だか安心する。前世の事があるからかもしれないが、事実だ。

アルジエントはうじうじしない、凜としている。結構、いやかなりズバつと言うし、正直に話してくれる。何かを隠しているという感じはしなかった。

(あれ、もしかしてこの3人って意気投合できんじゃない？ いや、できるよね)

「……………」

(あ、なんかうちの日常生活が色んな意味ですごくなりそうっ！！)

「何マヌケな顔をしているのかしら？早く琥珀っていう子のもとに行くわよ」

アルジエントが風歌のおでこを指ではじく。

「あいたっ！？」

アルジエントは、妖艶な笑みを浮かべて、さっさと歩き出す。

「ちよっ、早いって！」

こうして、風歌とアルジエントの非日常な生活が始まった。

4* 非日常のハジマリ（後書き）

今回は、風歌とアルジエントの会話メインです。

次話は、アルジエントの初登校です！

琥珀と那珂を絡ませたいと思っております^^

5* 季節外れの転校生は（前書き）

戦闘シーンはまったくありません

4人の絡みメインです。

5* 季節外れの転校生は

季節外れの転校生は、銀の髪をなびかせた、美少女

「アルジエント・ディア・スモルツァンドよ」

教室中に歓喜があがった。

(窓ガラスにヒビ入ってる！)

「じゃあ、スモルツァンドの席は」

「ああ、風歌の隣がいいわ。昔からの知り合いだから」

今は昼休み。風歌、アルジエント、琥珀、那珂の4人は立ち入り禁止の屋上にいる。

休み時間に紹介したかったが、アルジエントがお約束の質問攻めにあっていたので、結局昼休みになった。

琥珀には、登校中に紹介は済ませてある。お互い、第一印象がよかったのか、だいぶ親しく話す。

(第一関門突破！)

「アルン、この子は真柄那珂」

「那珂って呼んでいいよ」

「分かったわ。私のことは好きに呼んで」

「じゃ、私もアルンって呼ぶ」

那珂は笑顔で、アルジエントに手を出し、握手を求める。

「よろしく」

こうゆう機会が少ないのか、少し照れ臭そうに握り返す。

(か、かわっ……………)

「……………」

アルジエントに睨まれた。

(読心術！？)

「にしても、風歌に外人の知り合いがいたなんて初耳だな」

琥珀が、焼そばパンを頬張りながら言う　大好物。

風歌と琥珀は、幼稚園からの仲。お互いの事はよく知っている。琥珀は驚きが隠せない様だ。

「あー、うん。言ったことなかったから…」

「どうして？」

言葉を濁す風歌に、那珂が容赦なく問いただす。

(那珂、目が恐いっす！)

「ああ、それは私が口止めしたからよ」

そこでアルジエントが助け船を出す。

「アルンが？」

「そう。私の外見が外見でしょ？」

もし、風歌が自分の友人に銀髪的美少女がいると言ったら？

「会ってみたいな」

「琥珀、飲み込んでから喋ろうよ」

「そう。みんな風歌に詰め寄る、外国にいる私はなかなか日本に戻れない。だったら、私が日本に来たとき紹介すればいいのよ」

「たしかに。噂にもなっちゃうしね」

那珂が納得したように頷く。2人は、それ以上深い追求はしなかった。

(助かった…)

(まったく、感謝しなさいよ)

突然、脳にアルジェントの音が響き渡った。驚いた風歌は思わず声を上げる。

「何だよ、北澤でも見たのか？」

北澤というのは、数学教師のことだ。分かりにくい上に、ハゲていることで評判は非常に悪い。

「なんでもない！ただ、葉結姉に録画を取り消しされたかもしんない…」

何だよ、と言って焼そばパンを食べ始める 2個目。

(“討伐者”と“鶴”の間だけでできるやり取りよ。相手のことをイメージしながら心ね中で話し掛けるだけ)

(そうなんだ…聞こえてる?)

(もちろんよ)

キーンコーン…

「お？もう予鈴なってるのかよ！」

「琥珀だけよ、食べおわってないの！」

琥珀は、一口で食べるにはまだ大きい3個目の焼そばパンを放り込む。

「もぐもぐもぐ……」

「ちょ、風歌！アンタも食べおわってなかったのね！？ 待ってるから早くしなさい」

「つかさあ、こうなったら4人で堂々と遅刻しね？」

「私、転校初日なんだけど」

「ヘーキヘーキ」

手をひらひら降り、炭酸水をゆっくり飲む。

「あ、そういえば、さっき思ったんだけど……」

那珂が思い出したように言い、荷物を床に置いて座る。

「なに？」

立っていたアルジェントも、那珂につられ座る。

「アルンの歓迎パーティーしない？」

「あ、それ楽しそう！」

「ふあーふいー？」

「飲み込んでから喋りなさいってば……」

琥珀に注意してから、アルジエントに向き直る。

「いいでしょう？パーっとやりましょうよー！」

「わ、私のために？」

いきなりのことで、アルジエントは動揺する。

それもそうだろう。今まで、終わりの見えない戦いをずっとしてきたのだ。このようなイベントは無いに等しい。

「やろつよー！」

「名案だな！いつやる？」

「そうね…来週の土曜日は？」

「え、その日ってテスト2日前じゃん」

「いいだろ。みんなで夏休み補習受ければ」

もはや、アルジエントの意見は完全スルー。

（まあ、風歌から離れなければ何でもいいわよね）

「補習受ける前提！？うち殺されるんだけどっ」

「そこは心配しなくていい」

「何故じゃ!?!」

風歌が腕を組み、渋い顔で琥珀を見る。

「あたしも殺されるから」

「頼りねええ!!!」

「今から勉強始めれば1日分くらい補えるわよ」

「出ましたよ琥珀さん。那珂さんの頭良い発言!」

「あーあー、やんなっちゃうよな、まじで」

すると、今まで黙っていたアルジエントがいきなり

「だったら、私が基礎からみっちり教えたいわ」

「決まりね。これから昼休みと放課後は勉強会よ」

「ええーっ!」

風歌は悲鳴を上げ、琥珀は心底嫌そうな顔をする。

「部活はどーすんの?」

「サボりなさいよ」

「那珂もサボんのかよ」

「当然」

那珂は胸をはって答える。

「2人は教えがいがありそうね」

アルジエントが、ニヤリと笑い腕を組む。

「「覚悟しなさい」」

学校中に、風歌と琥珀の叫び声が響き渡った。

その後

「遅れてすいやせんしたあ！」

勢いよくドアを開けた風歌の額に白チヨークがクリーンヒットし、後ろに倒れる。担任の中川が、古典の授業をしていた。

「お前ら…堂々とした遅刻だな？ あ？もう6時間目も10分で終わるぞ」

「妊娠してる人を助けてた」

琥珀が真剣な顔で言う。

「そーかそーか、大変だったな」

「先生っ！真柄那珂、命の重みを学習しました！」

「そーかそーか、偉いな」

「私は、この3人の馬鹿さを理解したわ」

「そーかそーか、理解できたのか」

クラス中、笑い声で包まれる。

そして、最後の一言……

「これから放課後は、学校中の雑草抜きをしてるおおおおお……！！」

「……えええっ！！??」「」

「あはははっ！」

風歌、琥珀、那珂の大絶叫と、アルジェントの笑い声は、いつまでも続いていた。

5* 季節外れの転校生は（後書き）

次話は、歓迎パーティーについて書きたいと思います。

6 * 歓迎パーティーと紅の世界

「おーおー！雲一つないキレイな青空っ」

今日は、アルジェントの歓迎パーティーの日。今の時刻は9時。10時に大野家に集合、その後街に出て案内兼歓迎パーティーという名の遊び。

「それにしても、先週は大変だった…雑草抜き」

あの後、担任の中川に言われたとおり、学校中の雑草がなくなるまで抜き続けた。

そのため、テスト勉強は朝一で学校に集まり、アルジェントと那珂のスパルタ勉強会が行った。

「そういえば…最近夢見ないと思ったら、今日見たな」

あれ以来、夢もほとんど見ず…というより、覚えていない状態が続いた。“生屍”も、2人の前に現れる気配がない。

たしか、アルジェントと出会ってから1週間は経つ。本当になにもない、平穏な日常を送っていた。俗に言う、「嵐の前の静けさ」だったとしたら……。

「やめやめ！今日は遊びまくるのになんちゅー事考えてんのっ」

頬を、思いつきり両手でパン！と叩き、思考を停止させる。

クローゼットを開け、今日着ていく服を選ぶ。

「春は風強いからスカートは穿きたくないよね…」

悩んだ末、デニムのサロペットにした。

姉の葉結に、ヘアアレンジをしてもらい、朝食を食べ、空と一緒にゲームをしていたら。

ピンポン

「うお！来ちゃった」

「早く行けよ姉貴。ルージはもう死んだ」

「ちよっ、空！強いから。手加減という言葉を知らないの!?!」

「手加減？オレにそんな器用なことできないね」

「コノヤロオオオオ！覚えてろっ！いつか下克上してやっかな」

「バーカ！オレに勝つ日なんて来ねえよ」

「空のあんぱんたんっ」

という、実に幼稚な台詞を残し、玄関へ走って行った 道場だけに家デカインです。

「おまた
」

「遅い」

玄関のドアを開けた瞬間、チョップをくらい、その場にうずくまる。

「どれだけ待たせば気がすむの？」

「ごめんってば、那珂」

腕を組み、仁王立ちをしていた那珂が、風歌を見て笑う。

那珂は、ピンクの花柄のひらっひらワンピースを着こなし、小物をたくさん身につけ、かごバッグにも花のコサージュを付けている。

（チクシヨ―美脚だなオイ）

「お？風歌いじめ？風歌いじめやってんのか!？」

そこへやって来たのは、琥珀。そこはかたく嬉しそうな感じで2人に近寄る。

「その笑顔は何ですか琥珀う！風歌ちゃんは悲しいよ」

「悲しんでろよ」

「のおおおおおん!!!」

琥珀のファッションは、絶対ズボン。制服以外で、絶対にスカートは穿かない。

黒い帽子をかぶり、シャツを着崩しネクタイゆるゆる。黒のベスト

にベルト、ボトムスはチェック柄のスキニーズボン。

「あら…みんな集まるの早いわね」

と、今回の主役である、アルジエントがやってきた。

アルジエントは、銀の髪を上纏め上げ、長袖Tシャツの上にベストタイプのフードに毛が付いているダウンを着、ボトムスはデニムの短パン。

「そつゆう服着るんだね」

風歌が以外そうに言う。

「今日はね。スカートを穿くときもあるわ」

4人揃ったところで、早速街に出かけるため、駅に行き、電車に乗り込む。

「…………あのさ、めっちゃ視線感じるんだけど」

電車のつり革に捕まりながら風歌が遠慮がちに言う。

「心配するな。あたしも感じる」

「同じく私も。ま、元凶は言われなくても…」

そこまで言い、那珂はチラッとアルジエントを見る。

「……………」

那珂に合わせ、風歌と琥珀もアルジエントを見る。

「……………」

3人の視線に気づき、アルジエントは見返す。

「…あのさ、アルン。なんとかならない？」

代表して風歌が言う。なんとか、というのは言うまでもなく、周りの視線。

「…琥珀がガン飛ばせばいいじゃない」

「あたし関係ないから。元凶アルンだから」

「私もそう思う。アルン、頼んだ」

嫌そうな顔をし、風歌を見ると、ウィンクしながらガッツポーズされる。

はああ、と長い長い溜息をつき、周りの人に蛇を殺せるんじゃないかというくらい、睨みつける。

「おお！面白いくらいに一瞬で全員目え逸らしたね」

風歌が感動し、アルジエントを敬つような目で見る。

「アルンすっげー！アルンすっげー！！」

「電車では静かにしろ！」

「琥珀、アンタも十分うるさいわよ」

「那珂もうるさいわ」

なんやかんだで雑談しているうち、あっという間に目的の駅に着いた。

駅を降り、街案内をしては店に入って買い物（アルジェントに奢りしながら）、街案内しては買い食い、道案内しては店に入って馬鹿をやっていたら…

「あ、もう4時なんだ」

ケータイで時間を確認した風歌が言った。

「早かったな、今日1日」

「本当に。でもなかなか楽しかったじゃない」

那珂の言葉にアルジェントが頷く。

「私も…なかなか楽しめたわ」

「んじゃ最後に…パアッとカラオケ行こうよ！」

風歌が両腕を上げ、それを琥珀が下ろさせる。

「よし！うんじゃ行く……」

最後まで言わずに、琥珀は言葉を切った。

「琥珀？」

「風歌！敵……“生屍”^{ゴース}よっ」

“生屍”という言葉に、風歌はその場で凍りつく。

気がつけば、周囲の人々……否、フィールド内の時間が、全て停止。そして、世界は紅く染まる。

「ど……どうしようー！」

「ちっ……こんな時に“生屍”なんて」

アルジエントは、自身の体内から曇りのない太刀を取り出し、構える。

「風歌っ、私から離れないで！」

「う、うんー！」

すぐにアルジエントの後ろに近づく。

「ア……アルン……」

「大丈夫だから」

すると、2人の目の前にマネキン人形が数十現れる。

「やあ、『しろがね銀の魔女』」

そこに現れたは、空中に浮かぶ、白いスーツを着た青年。

「『人形使い』…グリアラ！」

青年　グリアラ　は、不敵に笑うと、こう告げた。

「さあ、赤い紅い喜劇グランギニョルの開幕だ　」

6 * 歓迎パーティーと紅の世界（後書き）

ふう、やっと戦闘シーンが書けそうです。

次話は、“永遠の戦”^{エス・ウォー}一色で

いきたいと思います。

7* Grand Guignol

アルンには悪いけど、

絶対嘘だって思い始めた。

だって、そうでしょ？

1週間音沙汰なかったから。

このまま、アルンを入れた4人で

馬鹿やってく日常をおくって…

そう、思ってたから。

ああ、

今うちの目前に広がる

紅^{あか}の世界が、

早く終わればいいのに。

うちは、震える身体を、

必死で耐えるので精一杯で。

周りのことなんて

全然気づかなかった。

『人形師』グリアラ。666年前のアルジェントが倒せなかった、敵。

グリアラは、名前通り人形を操り攻撃をする。操れる人形数が多い上に、人形はそれぞれ武器を持ち戦う。

グリアラの武器は人形だけでなく、操る際に使用する見えない透明の糸 『ルーダ』 の餌食になってしまったため、迂闊に動けない。『ルーダ』を切っても、グリアラが瞬時に作り出すため、きりがない。

(風歌、まわりに見えない糸が張り巡られてるから余計に動かないで)

声なき声で話しかけても、返事がない。

(…風歌?)

後ろを振り向くと、風歌がうずくまり震えていた。自身の頭を抱え込み、下を向き、世界を拒絶するかのようにならな。

「おや、そこのお嬢さんは…『銀の魔女の』“ぬえ襦”かい？」

「……………」

アルジエントは押し黙り、代わりにグリアラを睨みつける。

「おや、そう睨んでは美しい顔が台無しだ」

そう言いつと、地上に降り、ゆっくりとアルジエントに近づぐ。

「沈黙は肯定とするよ」

「想像に任せるわ」

「ククッ…相変わらず強気な口調だね」

目の前で止まると、グリアラはアルジエントの頬に触れてから顎を掴み、上を向けさせる。

そして、顔を近づけ後数センチというところで止まる。

「本当、君は殺しがいがあって嬉しいよ」

ここで、アルジエントが口を開ける。

「ふん。その言葉、そっくりそのまま返すわ」

一瞬、驚いたような顔をし、すぐに笑みへと変える。

「お前のようなヤツを見ていると、跪かせたくなるわ」

「ふっ…ふはははは！君は最高だよ、『銀の魔女』！よほど僕に殺されたいらしい」

アルジェントから手を放し、再び空へと飛ぶ。

「お望みどおり、今すぐ殺してあげよう」

「ふん、誰が。大人しく殺されなさい」

2人の戦いが、始まった。

(…とは言ったけど、正直厳しいわね)

会話直後、グリアラの操る人形の攻撃が始まり、アルジェントは風歌を守りながら攻撃をかわす事が続いた。

「どうしたんだい？さっきから逃げてばかりだ」

グリアラの余裕の声音に、舌打ちする。

(人形を壊しても意味がない…なんとかして相手に直接攻撃しないと)

右手に持っていた長身の太刀を空中にしまい、新たに二丁の銃を取り出す。人形を破壊し、細い『ルーダ』を的確に撃ち、切る。

しかし、グリアラはすぐに『ルーダ』を作成、さらに、『ルーダ』で人形を創り出した。初めて見る光景に、アルジェントは絶句する。

「君は、僕の人形がマネキンだと思ったのかい？僕の『ルーダ』は操る系の作成だけでなく、人形も創りだすのさ」

あっという間に、人形の数が増えていく。

(っ、まずい！早くグリアラを……)

人形たちは、手を前に突き出すとそこから炎を発射する。

「炎！？ まさか、『ルーダ』の摩擦……？」

咄嗟に風歌を抱え、ビルの屋上へジャンプし、避難する。

「う……あ？」

浮遊感を感じた風歌は、震えが治まり、ゆっくり立ち上がる。

「風歌……」

「あ、アルン」

アルジエントは、風歌にさきほど遭った出来事を簡潔に話す。

「風歌、君はここに隠れてて」

「え、あ…うん。でも、アルン平気？」

「平気にさせるのよ。あの白装束、すぐに殺してあげるわ」

アルジエントは銃を構え、風歌を残し屋上から飛び降りる。

(炎を出してくるなんて…つくづくうざったいわね)

引き金を引き、銃口にバレーボール大の大きさの水の弾が現れる。

「撃ち抜け、水弾っ！」

引き金を離すと、水弾は水色の輝きを放ちながら人形を追跡、破壊してはアルジエントのコントロールにより標的を定め、また破壊する。

「ほう、的確に操作するとはなかなかだ」

「随分と上からの発言ね。慎んだほうがいいわよ」

（アルン！）

すると、脳裏に風歌の音が響き渡る。

（うちも…うちも、アルンと戦いたいっ）

（ふ、うか？）

（うちだけこっそり隠れてて…アルンは戦ってる。そんなの……なんか嫌だ！）

（なんか、って…）

（とにかく、うちも戦う！だから、ビルの屋上からグ…なんとかの間に人形を寄せ付けなくてほしいんだけど）

（いいわ。風歌を信じる）

(ありがとう！)

アルジエントは、人形を攻撃しつつ、逃げているフリをしてビルから距離を離す。

グリアラは、風歌のいるビルに対して正面を向いているため、アルジエントは後ろに回りこみ回し蹴りをかます。

「君の動きはバレバレだ。無駄な抵抗はやめたらどうだい？」

「ちっ」

バク転を3回し、グリアラから距離をおく。

(あ、)

グリアラの後ろに回りこんだため、アルジエントはビルの屋上にいる風歌を視界に捉えることができた。

風歌は弓を構え、周りの“気”を集めている。風が風歌を囲み、風歌は風を受け入れる。

「アルンのために、うちは戦うっ！」

風歌は、矢を放った。

8*偽り

アルンに守られてはっかじゃ嫌だった。

命懸けの戦いをアルンはしてる。

うちは、隠れて見てるだけ。

この戦いは、うちも戦わなきゃいけないんだ。

アルン1人の戦いじゃない。

うちの戦いでもある。

だってアルンの“鶴”だから。

でも、うちにはアルンみたいな力はない。

だから、強く願ったんだ。

アルンを助けたい！

そしたら、不思議な事が起こったんだ。

うちの足下に、銀色の…魔方陣っていうのかな？それが浮かび上がって。

目の前には、銀色に輝く弓矢が浮かんでた。

うちはそれを取って、弓道の時と同じように、引いた。

そしたら、また不思議な事が起こったの。

なんてゆうか、周りの風とか気がうちに力を貸してくれるみたいに集まった。

矢が、銀色に輝きだした。直視できないくらいに。

いける、と思ったうちは全神経を集中させて。

矢を射った。

ビルの屋上から銀の煌跡をひく矢が、一直線にグリアアラへ向かってきた。

グリアアラは、風歌の射った矢にまったく気付かず。

「ぐっ……!？」

気付いた時には、もう遅い。

矢はグリアアラの胸を貫通、さらにその後風歌が射った2本目の矢は左太股を貫通した。

グリアアラは倒れる事なくその場に踏ん張り、最後の力だろうを振り絞り、必死に人形を操る。

「終わりね、グリアアラ」

フラフラの人形達は、アルジェントの刀によって斬られる。

それでも諦めようとしないうグリアラに、刀を締め、銃を取り出し、てはこめかみに押しつける。

「で、何か言い残すは？ あるなら今のうちよ」

アルジェントの問いかけに、ただ薄ら笑いをするだけで何も喋らない。

そんなグリアラに違和感を抱きつつ、アルジェントが引き金を引くとした瞬間。

「っ!？」

さっきまで感じられなかった強い気迫が、アルジェントを襲う。

これは、“^{ゴブス}生屍”の中でも力のあるもの “死神”の放つ力のものだ。

そして、その力の矛先は……

「きゃあああああ!？」

風歌の悲鳴が、フィールド内に響き渡る。

「風歌っ!!!」

アルジェントは焦りを感じ、その場から跳躍し、ビルの屋上へと跳ぶ。

そこにいたのは人形に捕らえられた風歌と、グリアラだった。

「……下にいたのは、ダミー……」

不安と焦りの感情を殺して、冷静を装う。

「僕の人形相手に大分苦戦したようだね？」

クツクツと笑うグリアラに、沈黙を続ける。

「君の“鵂”……今まではとんだ無能だった」

過去を憶測し、懐かしむように言う。

「それが、どうだね？ 素晴らしい力を持っている」

「だからなによ？」

グリアラの口端が吊り上がる。

「僕の舞台 グランギニョル 喜劇の主人公に相応しい ヒーロー」

そう言い、ぐったりしている風歌に近づく。

すかさず銃弾を3発放ち、グリアラの行く手を阻む。

「私の“鵂”に……風歌に近づかないでくれるかしら」

絶対零度の瞳でグリアラを睨む。

「それは無理な願いだ。これはもう僕の人形だ」
マリオネット

「人形…？ 風歌が、お前の……？」

そう呟いた後、アルジェントの瞳がエメラルドグリーンから焔ほむのよ
うに赤い紅蓮に変わる。

「冗談もほどほどに下さいよ……」

「冗談？ いつ、誰がそんな言ったのかね」

「ああ…お前、相当私に殺されたいみたいね」

いつもより、声のトーンが低い。その声音には、アルジェントの怒
りがふんだんに含まれている。
殺気を放ちまくってるアルジェントに少し後退りするも、グリアラ
は食い付く。

「まさか…僕の新しい人形で、君を殺してあげよう」

新しい人形というのは、間違いなく風歌の事だろう。

グリアラの言葉に、アルジェントの怒りはついに頂点を越えた。

「本当に、昔から、お前は嫌い」

アルジェントの言葉に、そうだったんですか、というような顔をす
る。

「風歌を返す気がないなら、無理矢理奪い返す…！」

今度は銃をしまい、刀を取り出す。斬りかかろうとするアルジェントを、風歌を使って制止させる。

もちろん、アルジェントには風歌を傷つける事は不可能。

「なっ!?!」

慌てて刀を引っ込め、素早いバックステップで距離をとる。そんなアルジェントの行動を面白がるように笑う。

「なんのつもり? 返答によっては今すぐ殺すわよ」

「君の反応が面白くて、ついね……人形劇は今日じゃつまらない」

考え込む仕草をしてから、こう言った。

「準備が必要だからね…3日後、この時間にこの場所で人形劇を公演しよう」

「待ちなさいよ…その間、風歌はずっとお前の許にいますとも?」

当たり前だというように両手を広げる。

「馬鹿じゃないの? そんな事させるわけないわ。その3日間、風歌が無事でいる確証なんてないじゃない」

「君の方こそ馬鹿だね。僕が新しい人形をそう簡単に壊すわけないじゃないか」

そして、2人の間に不穏な空気が漂う。

考えた末、アルジエントはグリアラの言葉を信じることにした。

「　いいわ。3日後ね。今すぐ殺せないのは残念ね」

「焦らずとも、僕が3日後君を殺してあげよう」

白いマントを取り出し自身を取り囲むと、グリアラは人形と風歌とともに消えていった。

「しっかりとやりなさいよ　風歌」

アルジエントの呼びかけに、声なき声で風歌が答える。

（イエッサー！）

8*偽り(後書き)

サブタイトルの「偽り」という意味ですが、実はグリアラが人形だったことと、捕らえられてぐったりしている風歌が“演技”していたからです。

後者の詳細は次話で！

9*デパートの廃屋で小さなお人形さんと

(うぶ……やばい、ごっつ気持ち悪い)

グリアラに拉致された風歌は『ルータ』で全身をまかれ、ぶら下げられながら夕方の空を満喫する。

(空ってこんなにキレイだったんだ)

と、場違いなことを思うのは、酔いから逃れるため。実際、風歌の目は下を向き、街並みを眺めている。

(この浮遊感、超ヤダ！)

顔を真っ青にして、心中で叫ぶ。

(でも、アルンに言われたことちゃんとしないと……)

アルジエントに言われたこと。それは、弱り捕まったフリをすることだ。

アルジエントが“死神”の気を感じ取った瞬間、風歌に声なき声で話し掛けた。

大人しく捕まったフリをしてなさい

言われた通り、風歌はいかにもやられた、という感じでぐったりしていた。

その後、グリアラは3日後という期日を指定した。

当然アルジェントは信じるつもりはひとかけら一欠片もない。

信じた、と見せかけて明日にでも奇襲をかける、と言っていた。

風歌は、あの時の言葉を思い出す。

風歌、私は3日も待つつもりはないわ

うん、そう言っと思った

明日にでも出向きたいと思うわ

で、うちは何すればいい？

そうね。大人しく捕まったフリをしつつ、そっち側の情報を、出来る限り教えて

えっと、テレパシーで？

テレパシー…そうね、テレパシーで

そして、最後にアルジェントはこう言った。

突入する5分前になったらテレパシーで連絡するわ

と、回想しているうち、本格的に気持ち悪くなってきた風歌は声を絞り出す。

「あ、あの……降ろして、くださ……うおええっ！」

「なんてはしたないレディなの!？」

甲高い声で喋るのはグリアラのお気に入りのお人形、マティルド。
栗色の髪に、ピンクの豪華なドレス（しゅじや）を着てグリアラの頭の上に座っている。

「だって……まじ、は……吐く……う……う……う……」

両手で口を押さえて、リバーズするのを必死で堪える。

「おぼろろろ……」

本当に我慢できなくなった風歌は、空中でやってしまった。

「まあ!まあまああ!!!」

人形特有の笑みのまま、マティルドはグリアラの頭でジタバタ暴れる。

「あなた、なんてことしているの!?! 信じられない! 信じられない!!!」

「に、2回も……言わんで……うっ……」

「まったく。可愛い僕のマティルド、君はこんな事してはいけないよ」

こんな事やそんな事の前に、マティルドは人形。出来るわけがない。

「当然でしてよ。ああ、ドレスに臭いが付いてしまっじゃない！」

(知ったこっちゃ、ねえよ…！)

気持ち悪いながらも、心の中ではしっかりしている。

(ア、アルン…うち、空で吐いちゃった…)

アルジェントからの返事は、

(知ったこっちゃないわ)

だった。

(吐いたなら、後始末しなさいよ)

そう言った後、関係ないことで“テレパシー”を使ってくるな、と注意され上に、ぶち切りされた。

風歌は遠い目をする。

(なんかもう、どうでもいいや…)

などと考えていたら、気持ち悪いのが治まってきた。どうやら、目的の場所に着いたようだ。

「まったく、たったの5分しか飛んでいないのに…汚らわしい！」

「人形には分かんたろうよ、この辛さっ…！」

「あなたのような人間のことなど、分かりたくもないですから」

この、丁寧なようで丁寧じゃない喋り方が腹立ってくる、と風歌は思う。

「つか、ここどこ？」

辺りを見回してみる。分かることは、この空間はコンクリートで造られているということと、春の季節にしては暖かいということ。

「ここは、もともとデパートだった廃屋ですよ」

いつの間にか、マティルドは風歌の足元にいた。

「ぎゃっ!?!」

「本当にはしたくないレディですこと」

「レディじゃない! 乙女だよ」

妙なところにこだわるんですね、と言いつつ続きを話し出す。

「たしか……あじます有升デパートだったと記憶してますわよ」

有升デパート。

風歌の家からそう遠くない、駅前にあるデパートだ。

客もそこそこ入っていたが、近くにできた他のデパートに客が流れ

込み、2年前、倒産となった。

「人間も近寄ってこないからね。基地にするには丁度いいんだよ」と、グリアラが説明してくれる。

「へえ」

「なんて間抜けな返事なこと！ グリアラ様に向かって……身の程を知りなさい」

マティルドはぴよこぴよこと風歌に近づいては足をポコ、と叩く。

ため息を零し、謝ろうとするとグリアラがそれを遮るように話しました。

「いいさ、マティルド。僕は気にしてないよ」

「まあ、さすがグリアラ様ですね！ 心がお広いですわ」

マティルドの風歌とグリアラに対する態度が違いすぎて、嘆息する。

(なんか、疲れた)

「ちょっと人間！」

「風歌だよ」

「貴女、今疲れたって思ったでしょう！ 大変失礼なことではないですか？」

マテイルドに指摘され、風歌の肩が少し跳ね上がる。

(読心術!? おっかな……寿命縮むしっ)

「きいいいっ!! おっかないですって!? その口縫ってさしあげましょうか!?!」

これをおっかない以外、なんといおうか。笑ったままこんな言葉を言つと、おっかなさ倍増だ。

「おおおももっ、思っておりませえん!!!!」

手と首を左右にぶんぶん振り、全面否定を主張してみる。

「本当ですか?」

「イエスイエスイエス!」

今度は首を縦にぶんぶん振る。振りすぎて頭がぐるぐるし始めた。

「人間はよく平気で嘘をつきますのよね」

「えっ、」

マテイルドが言った「人間」という言葉に、アルジエントのことも含まれているような気がした。

背筋に、嫌な汗が流れるのが分かる。

「私、人間が大嫌いなんです」

急に、マティルドの声が低く冷たくなる。

(なっ…に…!!?)

「そして、嘘をつくモノも大嫌いなんです」

心臓の鼓動が早くなり、鷲掴みされたような感覚に陥る。息も、少し乱れてきた。

「ましてや、人間が嘘をつくと　それは何が何でも、許せないですの」

「　っ!」

息が、止まった。

マティルドは危険だ。グリアラも相当だが、たくい類が違つ。マティルドのは、もっと、こう。。

「ま、貴女が嘘ついてないって言うなら信じてさしあげます」

グリアラ様の人形マリオネットですから

(アルンっ　　!)

風歌は拳を握り、アルジエントを思う。

「じゃあさ、うちが嘘ついてたらマティルドはどうすんの?」

震えで歯が鳴るのを堪え、できるだけ平然を装い尋ねる。

「そんな問いは愚問ですの。じわじわ痛みを炙りながら殺してさしあげますのよ」

世界中の時間が止まったような気がした。少なくとも、風歌はそう感じる。

(やばいやばい……！)

この空気を、なんとか崩そうとする。

「ほらっ、マティルドおっかないじゃんか！」

「まあ！ 貴女、まだその言葉を言いますの！？ あの時縫ってしまえば……」

さっきのマティルドに戻った。いや、戻してくれたのか。

定かではないが、空気が一瞬にして変わった。

(よか、た……)

キャンキャン吠えるマティルドを見ると、頬が緩む。

「なに笑っていますの？」

マティルドが怪訝そうに尋ねてくる。

「ん〜？ マティルドっておっかないけど、可愛いなって
風歌の予想だにできなかった言葉に一瞬、動きが止まる。が、すぐに
元に戻る。

「今更気がつきましたの？ 一言余計ですけれど」

「褒めてんだから素直に頷けばいいじゃん」

「私が可愛くて美しくて華やかなのはとっくに知っていますよ」

「うん。一言多いね、明らかに多いね」

「だまらっしゃい！」

マティルドは風歌の足を、思いっきり蹴る。

「痛っ！！ え、ちょ…なんで!?!」

さっきのは痛くも痒くもなかったのに!と叫ぶ。

「これだから人形は…この！」

「いったい！ 今のマティルド可愛くない!?!」

「何ですって!?! こんな口、閉じてやりますの!?!」

「ぎゃあああああ!?!?!?!」

「静かになさい!人間っ!」

(で、そっちの状況はどうなのよ？)

その日の夜、アルジェントからこんなことを聞かれた。

(マティルドがうざくて可愛い)

(はっ倒すわよ)

(有升デパートの駐車場にいますう！ ちなみに廃屋です！！)

(そう。じゃあ、また明日連絡するわ)

(オスっ！お待ちしておりますっ！！)

その日の晩、寝ている風歌にマティルドが延々と悪口あくぐちを言い続けられていた。

「人間起きなさい！ 私がいるのに寝るだなんて失礼極まりなくてよー！！！」

(誰か助けてっ！)

風歌は涙を流しながら寝ていたとか寝ていないとか。

翌朝、風歌の目の下にひどい隈とひどい充血があったのはいつまでもない。

10*沈黙考(前書き)

今回は短めです。

10*沈黙考

朝。太陽の光が眩しくて、目が覚める。

(あー…拉致られて有升廃屋デパートにいるんだった)

周りを見ると、グリアラもマティルドもない。

(…………結構怖いんだけど!?)

ぎゅるるる

「……………」

風歌の腹が盛大に鳴った。

「腹減ったああ!」

「朝っぱらからうるさいこと!」

甲高い声が聞こえたと思ったら、静かになさい!とか言いながら頭を殴られる。

「あつっ! ちょ、マティルド! ひどくね? これひどくね!?!」

風歌の言葉を見殺して、マティルドは子包みを渡す。

「…………爆弾?」

「あなたの朝食よ！ まったく、失礼ね。いらぬならこの最上階から下に落としますわよ！！」

「やだなあマティルド、冗談に決まってるじゃん！」

「そんなの当然です！」

(……このヤロー。まいつか)

小包みを開けると、やたらと大きいサンドイッチが5つ入ってた。

「感謝してほしいですわ。あなたの胃袋ブラックホールなんですもの。わざわざ大きいのを差し上げます」

「さすがマティルド！ うんうん。感謝してるよ」

笑顔でサンドイッチを1つ取り出す。

「いったきまーす！」

幸せそうに食べる風歌を見て、マティルドはこう言った。

「では、私はグリアラ様のところに行きますから」

「ふいつへふあつふあい」訳：行ってらっしゃい

マティルドの姿が見えなくなると、はぁーと長く息を吐く。

「マティルドと仲良くなったとはいえ、うち敵地にいるんだよね…

…おおっ！

<風歌…聞こえてる？>

風歌の頭にアルジェントの音が響いた。

<アルン！ うん、聞こえてる>

<無事みたいね。よかったわ>

だいぶ心配だったのか、その声は柔らかく聞こえた。

<今日、やるわよ>

アルジェントの声音が、変わる。それに対し、風歌は静かに頷く。

<時間は…そうね……昼にするわ>

<わかった>

<じゃ、また後で。何かあったらすぐ連絡しなさいよ>

<うん。またね>

(なんか、不安になってきた…かも)

全部のサンドイッチを食べ終ええた風歌は、また眠りにつくことにした。

(だって腹いっぱいになると眠くなる…)

「まあ、敵地で堂々と寝るなんて…神経の太いレディですこと」

気持ちよさそうに眠る風歌を見て、マティルドが呆れながら言う。

「マティルド、君はこのようになってはいけないよ」

「」安心を」

「それよりマティルド。『銀の魔女』は…昨日僕とした約束を信じるだろうか？」

「信じていないと思います。『銀の魔女』ですし」

「僕も同感だ。今日、『銀の魔女』はここにやって来るだろう」

グリアラはにやり、と笑い、

「盛大に歓迎しなくてはいけないね」

その言葉を残し、マティルドと共に奥へと消えて行った。

「……………」

風歌は、グリアラの武器“ルーダ”という特殊な糸を使った戦法について考えていた。

(なんかアイツ…自分の戦闘スタイルにコンプレックスがあるよう

に見えるんだよね)

昨日の戦闘で、グリアラは好戦的とみた。

(アルンのこと、だいぶ挑発してたよね…)

だったら3日間など決めなくても、あの場ですぐに風歌たちに攻撃してくれればいい。

……人形劇は今日じゃつまらない。

準備が必要だからね…3日後、この時間にこの場所で人形劇を公演しよう。

(準備って…うちをアイツのアレにさせるためのことだよな)

それなのに、グリアラは風歌に手を出していない。不自然だ。

(ってことは…グリアラは、3日間という時間が欲しかったんだ。でも、なんで?)

考える　考える風歌　。

(風歌を使って、うまいこと3日間というブランクを手に入れることができた…)

アルジエントは、自分と風歌は欠席する、ということを学校側に伝え、今日の戦いに向けて自宅待機をしている。

昨日、大野家には風歌は自分の家に泊まることになった、と伝えた。

あら、そうなの？ あの子イビキうるさいから耳栓して寝たほうがいいわよ。

なんていう千草からのアドバイスを貰い、朝を迎えた。

今は、今日戦う相手、グリアラについて考えを巡らせている。

（私はてつきり、風歌をアイツのアレにするための期間だと思ってたわ。でも、実際は違う）

“テレパシー”で風歌に状態を聞いたとき、たしかに何もされてないと答えた。マティルドがうざくてかわいいとも言っていた。マティルドは、風歌にずっと付ききりであったということになる。マティルドは風歌の監視役でもしていたのだろうか？

（敵のことをかわいい、なんてある程度親しくなっていないと言えないわよね…）

じゃあ、グリアラはどうしていたんだろうか。マティルドと一緒に風歌といたとすれば、何かしらグリアラの話しをするはずだ。この戦いの頭だ。逆に、報告しないほうがおかしい。でも、風歌は何も言わなかった。

（アイツは風歌の前に姿を現さなかった、）

風歌の監視をしていた理由。風歌が逃げ出さないため？ それもあるのだから、拘束をしなければ話しがつく。そうになると、風歌

がグリアラと会わせないようにするためとしか考えられない。

好戦的なのに、どうして3日間の時間を欲した？ どうして風歌の前に姿を現さない？

（ “ルーダ” になにかあるとしか考えられないわね ）

（ “ルーダ” に、きつとなにかあるんだ ）

そうして、昼はあつという間にやってきた。

10*沈思黙考（後書き）

【沈思黙考】ちんしもくこう

黙って深くじっくり考えること。広辞苑第六版より。

タイトルまんまっす。

風歌とアルジエントが考えをめっちゃ巡らせてるお話しなもんで。

ちなみに、漢検勉強中に知った四字熟語。

まさかこんなところで使えるとはWW

友加、吃驚感動!!!

11*昨日ぶり

<今から、そっちに向かうわ>

<うん>

<最後に確認。なにも、されてないのよね？>

<なにも。姿を見てもないよ>

<それだけで、十分>

<うん。十分だね>

<じゃあ、また後で会いましょう>

そう言って、“テレパシー”を切る。時間は、12時の、1分前。

(もし、私の考えが当たっているなら)

アルジェントは自分の拳を見つめる。

(絶対、勝てるわ。時間はかかるかもしれないけど)

ベランダに出て、青空を見上げる。呼吸を整え、跳んで屋根に上る。

(勝算は、ある)

膝を曲げて屋根を蹴り、銀の線をひきながら風歌のいる有升デパートへと飛んでいく。

有升デパートには、1分もしないうちに着いた。

ギリギリまで、待つ。

(あ、)

寝転がっていた風歌は、なにかの気配に気がついて起き上がった。

(この感じ…アルンが近くまで来てるんだ)

2人で1人となっている風歌とアルジエントは、お互いの気配等感知がしやすい。

そういえば、そろそろマティルドが昼食を持ってくる時間だ。来る気配がない…ということとは、向こうもアルジエントの気配を感じ取ったのか。

(でも、こちらが勝つ)

拳に力を入れる。大丈夫。

いくわよ！

アルジェントの声が脳に響いたと思った瞬間、“フィールド”が展開され、紅に染まった。

その一拍後には、ドゴオオンという音とともにコンクリートの壁が粉碎、土煙が視界を奪った。

「げほっ！ 目が…目がアアアアッ！！」

両手で目を押さえる。ム〇カみたいになっちゃったよ、と言いながら。

その次はいきなり強い風が吹き、土煙は消えた。

「……あら、人攫い野郎。昨日ぶりね」

「語弊を招くような言い方はやめてほしいね」

「まったくですわ」

晴れた視界には、アルジェントとグリアラ、マティルドが睨みをきかせあっていた。

（なんじゃこりゃ）

「僕たちはたしか…あの時、3日後と約束をしなかったかな？」

こめかみを押さえながら言う。

「そうね。したわ」

「まあっ！ 覚えておいて約束を破るだなんて…なんて無礼なのかしら」

「敵との約束なんて、守るわけないじゃない」

そっちだって、破ると分かっていたでしょう？ とアルジェントは言う。

「ククク…！ たしかにね。今日あたり来るだろうと思っていたよ。まあ、時間は外れたけどね」

先に動きだしたのは、グリアラだった。武器もなにも使わず、素手でアルジェントに殴りかかる。

「アルン！」

つい反射的に叫んだ。アルジェントは流れるようにかわした。

「直接突っ込んでくるなんて…変ね」

「……不本意ながら、僕はアレが嫌いだね」

アレ、とは“ルーダ”のことだろう。

ビュンゴッ？

おそらくは まだ断言はできないわね

風歌は数秒間じっとし、グリアラとアルジェントを交互見た。

(うちも、そろそろ動こうかな……)

よっこいしょ、と言いながら立ち上がり、とろとろ歩いてアルジェントに近づく。

「……………」

2人は無言のまま向かい合う。

(あ、ちょっと気まずい)

とりあえず、挨拶を試してみる。

「よう？ 昨日ぶりだね？」

「…なんで疑問系なのよ」

「えつとお、なんとなく？」

アルジェントは風歌をジロっと見た後、ため息をつく。

「はあ…。そうね久しぶりねご無沙汰ね」

なにもない空中から、スラツと曇りのない長身の太刀を取り出す。

「えつ…ええ！？ ちょ、アルン落ち着いて……………」

「再開を言ってる暇なんてないわよ。目の前の敵を始末しないと」

「…うん、そうだね」

自分でも驚くくらいの冷静さで答えた。つい最近までどこにでもいる普通の女子高生だったのに、と思う。

「最後のお話しは終わりかな？」

「最後、とは心外ね」

「そうだコノヤロー！ アンタをぶっ飛ばした後にゆっくり話すもんね！」

「あつちで、かな？」

「めでたい話しですこと…！」

マティルドの言葉を最後に、それぞれが動き出した。

風歌は、この前（というより昨日）自分で出した弓のことを、ウエンデイと名づけた。本人曰く、「名前があったほうがかっこいい」だそうだ。

「ウエンデイ！」

と言いながら手をを上に突き上げると、銀に光りながら風歌の武器
ウエンデイが現れた。

よっしゃグリアラに射ってやろうと構えた瞬間、目の前には5体のマネキン。

「ぎゃあああつ！！！！ ホラーだああ！！！！！！」

マネキンに驚き、反射的に叫ぶ。

「ちょっと！ 馬鹿やってないでぶっ壊しなさいよっ」

「だだだだつてえ〜…」

半ベそかいてる風歌の目前にいるマネキンに向かい、大きな炎弾を食らわせる。

マネキンはメラメラと燃え、黒焦げになって崩れ倒れる。

「あ、ある意味ホラー…！！」

なんて言ってる風歌に、また新たなマネキンが襲い掛かる。

「風歌っ！！」

アルジエントに怒られた。あの声音は絶対怒ってる。

「はいいいー！！」

咄嗟にウエンディを構え、1本の矢に力を込める。

「馬鹿ヤロー死んじゃえええ！！」

不意に、マティルドの声が聞こえてきた。もう一度見回すが、やはりどこにもいない。

「マティルド？ どこにいんの？」

「そう言われて場所を教える馬鹿がどこにいらっしやいますの？」

「うん…じゃあ、自分で探すから！」

「どござい勝手に」

よし、と言ってマティルドを探すため、走り出した。

11*昨日ぶり(後書き)

半端なところで終わらせちゃいました
でも続きを書いたらトントンデモナイことになってしまっんです多分

12*そして兄妹は消えていく

「君の“ぬえ鵺”は僕のマティルドに苦戦しているようだね」

「苦戦？ あれが苦戦に見えなくても言ってるのかしら。そうだとしたら大間違いよ」

左側からとんでくるグリアラの拳をひじで受け止め、素早く手首を掴んでそのまま高い背負い投げをする。

「アレでいいのよ」

「……おもしろい」

空中でバランスを整えるグリアラに、地面を蹴って跳んで蹴りを入れようとしますが、どこからともなく現れた糸、『ルーダ』に足が絡みつく。

「なっ…！？」

驚くのも一瞬。瞬時に短剣を取り出して『ルーダを』切り、地面に着地する。

「どうやら君たちは、『ルーダ』についてなにか知っているようだね」

アルジエントに続いて、グリアラも地面に降りてくる。

「ええ。少し考えれば分かることよ」

「うちでも分かった！ 多分分かってる！」

なかなか姿を現さないマティルドを探しながら、マネキンを撃破していた風歌が来た。

アルジエントのなにしてるのよ、という目を見た風歌は、

「いや、マティルドが見つかんなくなつてさあ！」

「やはり苦戦しているようだね」

勝ち誇った笑みをうかべるグリアラに、風歌は言う。

「うん。マティルドは…見つかったも、そこにいなくなっちゃうんじゃないかなあ」

グリアラの表情から笑みが消えた。

「なんてゆーのかな…ある女の子の魂？ を、あの人形に定着させてるんでしょ？」

「……………」

「^{イエス}是、ね」

グリアラの沈黙を聞き、アルジエントが言う。

「…ああ、そうだよ。あの人形には、マティルドの魂を定着させて

いた」

意味が分からない、という風に2人は顔を見合わせる。

グリアラは、ひどく悲しそうな顔をしながら、過去の話語りだした。

今からおよそ700年前。グリアラはフランスで生まれた。祖父、父、母、妹の5人暮らし。家は裕福でもなく、貧しくもない、いたって普通の家庭で育った。

家は代々人形劇の仕事に就き、祖父と父は人形師。その2人の背中を見ながら育ったグリアラも、人形師を夢とし、日々練習していた。

グリアラの20歳の誕生日に、初舞台となった。

劇は成功、客の歓声と拍手、家族たちの暖かな言葉。これ以上になり幸せだった。

あんな出来事さえなければ。

その直後、観客席から悲鳴が聞こえてきた。

見ると、物凄い勢いで、火が、燃えていた。

「父さん!!」

「慌てるなグリアラ。力のないヤツはお客様を避難！ 力に自信があるヤツは火を消せ！」

パニック状態に陥っている観客を、母と妹やその他の女性が観客を出口まで誘導する。その間に、男はバケツに水を淹れて火を消す。

火は消えることなく、より広く、より強く燃えていく。

避難は順調に進み、観客は全員無傷。次はグリアラたちが脱出する。

「げぼっ…みんな、無事か!?!」

咳き込みながらグリアラが問う。すると、祖父、父、母の返事が返ってきた。グリアラの妹 マティルド の声が、無い。

「母さん、マティルドは!?!」

「なにっ、いないのか!?!」

父が辺りを見回す。つられてみんなもマティルドの姿を探すが、見当たらなかった。

劇場内。

マティルドは1人、取り残されていた。

「あ…つい……」

火事によって燃え、落下した障害物により、マティルドは身動きがとれずにいたのだ。

ああ、みんなの人形が燃えていく。

「っはあ…！」

炎が酸素を奪っていき、まともに息ができない。

(私…死ぬ、の……?)

マティルドの頬に、涙がつつた。

その場で力なく倒れこみ、生きることが諦めたその時。

「マティルドー！ どこにいるんだ!？」

聞きなれた、大好きな兄の声が聞こえてきた。

「あ、に…さま」

「マティルド!? いるんだな！ 今から助けてやるから…！」

(ああ、いいのに兄様…私も兄様も、死んでしまっわ……)

「マティルドー！」

前にはマティルドがいるのに、障害物のせいで近づけない。それは

大きく、物と物の隙間からマティルドが見える状態だ。

「マティ…ルドッ！」

「駄目、です…兄様…。お逃げ、くださいっ…」

マティルドの言葉に、首を横に振る。

「そんなことは…できない！」

そうは言うが、グリアラの体ももう限界。視界はぼやけ、息をしているのかさえ分からない状態。

「あに…さまっ…！」

「っ、マティルド…」

その後、2人は“^{ヘル・ルイン}廃獄界”へと、堕ちていった。

グリアラは獄界の王と契約、“^{ゴーフス}生屍”となり、マティルドの魂を人形に定着させた。

「僕は、マティルドと共に生きていくことを決めたんだよ。長くね」

「あー、うん。そうなんだ…」

グリアラの過去の話聞き、なんて言えばいいのか迷う。

「だから、君たちを殺すよ」

「それはできないんじゃないかしら」

腕を組みながらアルジエントは言う。

「お前、もう『ルーダ』とやらが出せないんじゃない？」

「……」

黙るグリアラを見て満足そうに頷く。

「そうよね？ だって、糸を作るのに精気ルネが必要だから」

そう。グリアラの糸、『ルーダ』は、自身の精気から作成されている。グリアラが3日間という時間が欲しかったのは、精気を集めるためだったのだ。

「そもそも、“永遠エス・ウォーの戦”なんて、どうでもいいんでしょ？」

アルジエントに続いて、風歌も言う。

「マティルドと一緒に生きることだけでいいんだよ。正直、“永遠の戦”には関わりたくない。死んだらもう一緒にいられないから」

「マティルドは、こんなこと望んでいないじゃないかしら？」

「っ、そんなことはない！」

そう言うグリアラに、姿を見せないマティルドの声が聞こえてきた。

「……兄様。私は、グリアラという兄がいるという事実だけで十分ですわ。そんな…兄様の精気を消費させるまで、私を生かそうとしないてくださいまし…」

グリアラの表情が、悲しみで歪む。

「私は、もう700年前に死んでいるのですわ」

「マティ、ルド…」

「もう、兄様にはだいぶ…かなりお世話になりましたわ。これ以上、兄様の精気は減らしたくないのです」

「君が消えるなら、僕も一緒だ」

「兄様…」

グリアラは2人に向き直り、こう言った。

「僕を、殺してほしい」

予想していた台詞ではあったが、実際に言われると素直に頷けることができない。

「……風歌」

「はいいい…!」

いきなりアルジエントに名前を呼ばれて、驚く。

「あなたが、やりなさい」

「……………はい？」

アルジエントは風歌に向き直る。

「聞こえなかったかしら？ 風歌、あなたが殺しなさいと言ったのよ」

「いやいや！ 意味分からんしっ！」

「や・り・な・さ・い」

「うわーい、やっちゃんぞー」

「そう。じゃあ、よろしく」

風歌は泣く泣くウエンディを構え、狙いをグリアラに定める。

「……………マティルド、楽しかったよ」

「あら、私もそこそこ楽しめましたわ」

銀色の風が風歌のまわりで吹き出し、やがて突風に変わる。

「私より何倍も、何十倍も長生きなさいよ」

「うん。努力する」

矢にも銀の光が帯び始める。

「ありがとね　バイバイ」

「ええ　さようなら」

風歌は渾身の一撃を、グリアラに向かって放った。瞬間、視界は銀色で支配され、次に視界が戻ったときには、グリアラはいなくなっていた。

「……」

風歌は、ゆっくりと腕を下ろす。

「終わったね」

「この戦いは、ね」

アルジエントはそう言い、風歌に近づいて手を握る。

「アルン……」

アルジエントの気遣いに、涙ぐむ。

「さあ、帰るわよ」

「……うん！」「」

アルジエントは“フィールド”を解除し、2人は並んで有升デパートを後にした。

「もう！ 2人揃って風邪で休みだなんて…馬鹿！」

翌日、学校に登校した2人は、琥珀と那珂に説教…みたいなのをされていた。

「お前ら休むから、那珂が暇だ暇だ言ってるさかったんだ」

いまだに馬鹿馬鹿言ってる那珂に、琥珀は2人に耳打ちした。

「は、ははは…」

「それは…悪かったわ」

「そつよ！ 悪いわ。すつごく悪いわ！！」

暴れる那珂を、琥珀が押さえつける。

「お陰で、すつごい暇だった！」

「おい那珂。あんまり言うとあたし傷つくぞ」

「……ごめんなさい……」

琥珀と那珂のやり取りを見て、2人は笑いあった。

*
N
e
x
t

s
t
o
r
y
*

12*そして兄妹は消えていく(後書き)

はふー。

グリアラ戦、やっと

終わりましたww

長かったですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5363i/>

煌銀のアルジェント

2010年10月10日03時23分発行